I-26

東日本大震災復興を契機とした、地域の固有性・多様性に応答した地域再生の試み

～宮城県石巻市雄勝町における、地域・大学連携による高台移転と復興住宅の計画～

その４ 高台移転・船越

The trial of the local reproduction which answered the endemism and the diversity of the area beginning of the Great East Japan Earthquake revival
-The plan of the move to a higher elevation and revival residencies which made by the local government (Ogatsu Cho, Ishinomaki,Miyagi) and the association of some Universities -
＃4the move to higher ground of Funakoshi

◯矢野卓馬[1],佐藤太輝[1],芳我まり子[1],山中新太郎[2],佐藤光彦[2]
＊Takuma Yano[1], Taiki Sato[1], Mariko Haga[1], Shintaro Yamanaka[2],Mitsuhiko Sato [2]

1. 船越地区について

1-1.地区の概要

雄勝町船越地区は雄勝半島の北部に位置し、北側が海に接している。強い北西の風が吹き、雄勝の中でも寒冷な地域にあたる。被災前の人口は131世帯/331人で、住民の多くは漁業を営んでいた。北上川の養分を含んだ雪解け水が流れ込むため、船越の漁場は比較的豊かであり、ワカメ養殖、カキ、ホタテ、ホヤ養殖、小型定置網漁が多く行われている。

fig.1 名振地区の位置・高台移転

fig.2 震災前の船越

1-2.集落の特徴

船越の集落は山々に囲まれた谷の中にある。谷の中には海まで続くゆるやかな傾斜の道があり、その道に面して家々が建ち並ぶ事によって、道から人々の生活を感じられるような集落であった。

fig.3 船越の集落

2.被災状況

船越地区を襲った津波は海抜17mの高さがあった。fig3に示すように、従前の集落は海抜20m以下の谷筋にあったため、津波の被害が谷筋の奥にまで及んだ。土砂崩れなどの危険をがあるため、現在居住の認可が下りているのは残存住宅のうち１軒のみとなっている。雄勝総合支所による。アンケートでは今回の高台移転で54世帯が船越に戻ることを希望している。

Fig.4 被害の状況

3. 移転地の特徴

①.既存集落から離れた山頂部への集団移転

集落全体で高台移転を行う船越は大きな移転地を必要としている。湾から少し内陸に入った小高い山の頂部が移転候補地となっている。生活環境が反対な場所にこれまでと同じ集落をつくるのではなく、新しい環境のもとで船越らしい集落を形成する。

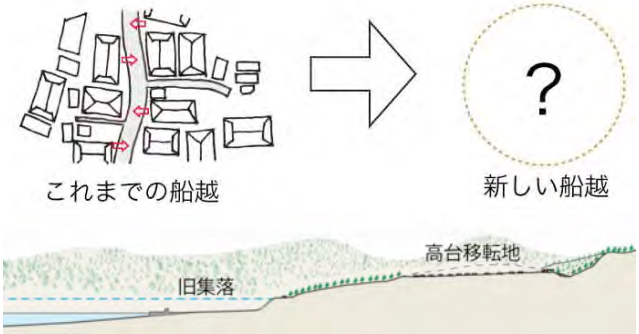

fig.5 全体断面

②.海から遠く、海を望むことができない立地

計画地の山には10m～15mほどの木々が立ち並び、海への視界を遮っている。漁を生活の中心としてい

１：日大理工・院(前期)・建築　２：日大理工・教員・建築

たので、人々の拠り所は海となっていた。がしかし、新しい移転地では海を望む事ができないため、それに変わる新しい拠り所が必要となる。

Fig.6 移転地の山と木々

４. 高台移転の計画

前述した移転地の特徴を踏まえ、船越の特徴である道から人々の生活を感じられる集落をつくるために、次のa~dの方針を設ける。

fig.7 高台移転計画の配置図

a. ループ状道路の設置

外周道路とは別に内周にループ状道路を敷くことで集落内を回遊できる主要道路とする。この主要道路に背を向けて住宅を配置しないことでこの道を中心とした街並をつくる。

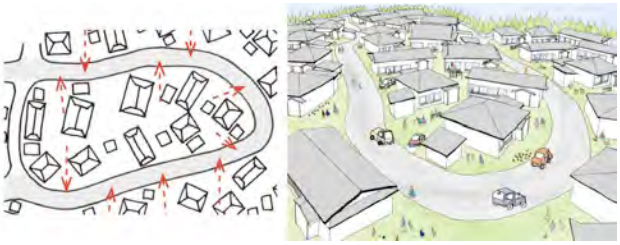

Fig.8 ループ状道路コンセプト図(左)集落のイメージ(右)

b.住戸クラスターの形成

ループ状道路によって大きく４つの宅地のまとまりを作る。ここに縁側の向きに配慮した住戸の配置計画を行うことによって住戸のクラスターをつくる。縁側が生活の中心の場所になるように縁側の向きを南東から南西の間に限定し、近隣との向きが90度より小さくならないように配置していく。そうすることでプライバシーを守りながら庭で視界を共有できる関係をつくる。倉庫は縁側からの視線を遮らない位置に配置する。公営住宅には２戸で１組の団地形式をとる場所があり、共用の駐車場、駐輪場を持たせた。その中に以前の集落と同じように傾斜を持つ路地を住宅を縫うように計画し、住宅同士はひな壇状の造成によって以前の集落と同じ様な隣地とのレベル差を持つ様に計画した。この共有スペースと路地が交差することによって人々が顔を合わせるきっかけを増やすことを目指している。

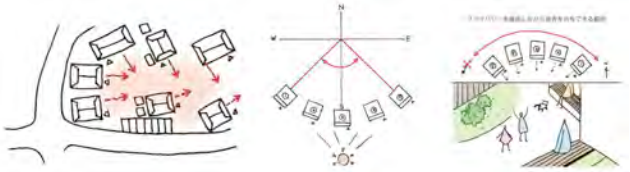

Fig.9 住戸のクラスターコンセプト図

fig.10 詳細平面・詳細断面

c.景観に配慮した造成計画

移転地の海側から山側にかけて高低差をつける。これにより水平に山を切る計画に比べ、景観の変化を緩和し、切り土量も少なくすることができる。周囲の既存の木を多く残すことによって、山に強く吹く北西の風を防ぐ防風林の役割をもたせる。

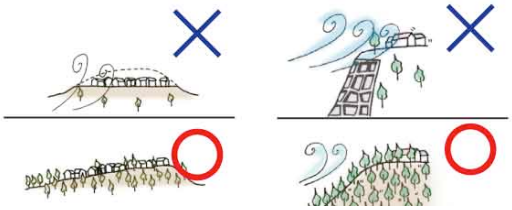

fig.11 造成計画コンセプト図

d.集会所を南端に、広場を北端に配置

集落の一番高い場所にあたる南端に集会所を、集落の一番低い場所にあたる北端に広場を設ける。集会所は一番高い場所にあるので新しい集落を一望できる。広場には海まで山を下る避難道を計画し、東屋を設ける。ここでは海の様子を確認することができるようにしている。